

JGA Golf Journal



World Amateur
Team Championships
JAPAN 2014

特集1

日本ゴルフ協会創立90年の歴史、100年目に向けて

特集2

世界アマチュアゴルフチーム選手権に向けて

堀田男子ナショナル強化部会長/阪本女子ナショナル強化部会長インタビュー

世界アマメンバーに選ばれたという
気持ちが僕の競技人生を長くしてくれた

1984年香港大会優勝 日本代表メンバー 阪田哲男氏インタビュー

日本ゴルフ協会 創立90年の歴史、100年目に向けて

創立90周年を迎えた(公財)日本ゴルフ協会。日本ゴルフ界の発展は目覚ましく、ゴルフを取り巻く環境も様変わりした。男女プロツアーの興隆、2度にわたるゴルフブームを経た現在、国民スポーツとして広く親しまれているゴルフではあるが、様々な課題も露見している。

安西孝之会長と永田圭司専務理事が、10年にわたる取り組みを振り返り、創立100年に向けJGAが取り組む施策について語った。



—1924年に創設された日本ゴルフ協会が、今年90周年を迎えました。当初は7倶楽部でのスタートでしたが、時を経て、日本のゴルフ界は大きく様変わりしましたね。

安西 JGAの歴史は非常に面白いんです。日本アマは、JGAができる以前の1907年に始まっているのですが、当初は日本在住の外国人たちが出場

しており、日本選手は参加していないんです。日本の選手が出場し始めるのは、1916年から。このあたりは、本当に他のスポーツとは違う歴史を持っています。

JGAの歴史の中では1957年のカナダカップ参加、1999年の国体参加、そして五輪復帰という3回の大きな節目があったと私は思っています。



—当然、JGAの役割も当初とはずいぶん変わってきたのでは？

安西 (2012年に公益財団法人となり)すべてのゴルファーを対象とする競技団体になったのは確かです。ただ、すそ野を広げたというだけで、1532の加盟クラブ(2014年5月12日現在)を始めとする会員たちには特権を与えるべきだと思っています。もちろん方向性はそちらに向いていますが。

—2003年に後藤田正晴氏(故人)の後任として就任している安西会長ですが、当時のことを少しお話ししてください。

安西 当時、日本体育協会会長だった私に『ほかのスポーツを見ているのだからあなたに白羽の矢を立てた。他のスポーツと別格のような扱いになっているゴルフを他のスポーツに近づけてくれ』と言われたんです。

—当時は景気も最悪で、ゴルフ業界も苦しい時期。どんなJGAを目指したのですか？

安西 JGAは当時、委員会単位で活動していたのですが、横のつながりが無い。専務理事が扇の要かと言えばそうでもない、という組織でした。総合

戦略が示されていなかった。1年くらい様子を見てから、まず、委員長会議をつくった。理事が委員長になるようにして組織を再編成したんです。話が伝わりやすいようにした。組織運営の基本ですね。

永田 90年の歴史の中で、JGAは仲良くボランティアでやってきた。その良さを残しつつ組織を改革するという難しさがありました。

—具体的目標は？

安西 まずは3オープン(ナショナルオープン)の在り方でした。ナショナルオープン(プロ)が一番勝ちたい大会でなければいけないのに、実態は賞金も高いわけではなく、運営だって毎年同じようなことの繰り返し。正直、JGAは(ナショナルオープンという名前に)あぐらをかいていたんです。これを活性化して収益事業にしなければいけない。『(すでに)ある収入をどう分配するか』という考え方だったのですが、それを『目標をたてて収入を得る』という方向に切り替えて欲しい、と、永田さんと二人三脚で徹底させた。それぞれの賞金も上がり、活性化は完成形に近づいていると思います。ただ、競技運営という点では、まだまだ古い殻に閉じこもっている部分がありますね。



安西 これはよくない。だからそういう人材をつくっていかなきゃいけません。

永田 こういうことも含めたいろいろなことが、これまで明快になっていなかったんですね。だからこれからはこれを“見える化”しましょう、と言っているんです。どなたでもわかる仕組みに変えていこう、と。

一五輪はゴルフの底辺拡大のビッグチャンスでもあります。

永田 そのためには世界に通用するスタープレイヤーの存在が大切です。それにはJGAだプロ団体だなどと言っている場合でなく、ゴルフオールジャパン体制で当たらなければならないと思っています。

もうJGAだけで何かができる時代ではなくなっているんです。だから、目標に対して関連団体をどうコーディネートできるかが大切なんです。“ゴルフオールジャパン”のコーディネーターとしてJGAがいかに勝負できるか、だと思っています。今はすべてが世界ランキング、つまりグローバルスタンダードで動く時代。

その中で、日本オープンの位置づけも考えなくてはなりません。

一世界のトッププレイヤーが集う大会に育てるといことですか。

永田 そうです。女子はともかく、男子は石川(遼)松山(英樹)の2人も出場しなかったのが実態です。『ナショナルオープンなんだから出るべきだ』というお題目を唱えていても仕方ない。サンクションも含めて世界の各ツアーとの連携を考えて、世界のトッププレイヤーたちが出場する大会にすることを考えないといけないんです。

一そのためには？

永田 コーディネーターとしての能力アップでしょうね。人材集めも含めてみんなが勉強のできる組織づくりも必要です。お金もかかりますけれどね。

一さらにスピードアップした改革が必要だということですね。ありがとうございました。

一次がハンディキャップシステムの改革？

安西 そう。方針が決定して3年経って、今年ようやく新しいシステムがスタートしました。基本的にゴルフのルールは世界共通なのだから、ハンディキャップもそうあるべきだ、という体制が作りたかった。現在のUSGAのシステムが完成ではなく、世界同レベルで改善していけばいい。そうすれば100年後には完成しているんじゃないですか。

一3番目の改革は？

安西 競技力の強化です。ナショナルチームの合宿を行ったりしています。練習というよりもトレーニング。方法が分かったら自分でできますからね。技術よりも基礎です。ただし、指導者もしっかり資格を持った人でないと今の子どもたちは言うことを聞きませんから。

一あと10年で創立100周年ですが、その前に今年是世界アマがあり、2016年にはリオ・デ・ジャネイロ五輪もある。そして2020年の東京五輪がある。急務が多いのでは？

永田 そうなんです。これまでは、時間がかかって丁寧に良さを残しつつやれば、加盟クラブが持つ大きなパワーが発揮されると思ってきたんです。ただ、これからはスピードアップしなければいけない。

一まずは世界アマですね。

永田 IGF(International Golf Federation)主催でJGA主管なのですが、実はルールズオフィシャルの派遣依頼もあったんです。これにはR&Aのレベル3のテストで80点以上取った者という条件が付いていた。そうなるとお恥ずかしい話、日本には4人しかいないんです。



JGA90年の主な歴史(概略)

1924年(大正13年)	「Japan Golf Association,創立。東京・駒沢の東京ゴルフ倶楽部に7倶楽部の代表が参集し,ジャパンゴルフアソシエーション(略称JGA)を創立。
1927年(昭和2年)	JGA主催で日本オープン選手権を創始。
1935年(昭和10年)	JGA副会長に大谷光明,理事長に森村市左衛門が就任。当時JGAの日本語表記は日本ゴルフ聯盟
1937年(昭和12年)	従来のJGAの英文規約,細則を邦文に改訂し,日本ゴルフ聯盟の名称を日本ゴルフ協会とすることを臨時総会で決定。従来のチェアマン制を会長制に改め森村市左衛門が就任。また,副会長制を廃止して大谷光明が理事長に選任。日本ゴルフ協会の関西支部を茨木カンツリー倶楽部内に設ける。
1938年(昭和13年)	JGAは日本体育協会(現・公益財団法人日本体育協会)に加盟し,陸上,水泳,体操,蹴球などのオリンピック種目と肩を並べられるスポーツ団体として認められた。戦時態勢に入り,ゴルフボールは各倶楽部あての配給制を決定。
1941年(昭和16年)	太平洋戦争勃発(12月8日)。昭和17年度のJGA主催各競技の開催は当分見合わせるとして各倶楽部に通知書を送る。
1942年(昭和17年)	日本ゴルフ協会は臨時総会を開催し,10月7日の解散を決議。大日本体育会の打球部会として発足し,部会長に井上匡四郎が就任し,日本ゴルフ協会の事業は打球部に引き継がれた。日本ゴルフ協会は解散に当たり,各加盟倶楽部に対して,これまでの事業の協力に感謝し,記念品と感謝状を贈る。
1943年(昭和18年)	打球部会宣言(5月)。井上匡四郎を部会長に発足した大日本体育会・打球部会は日本の打球の新しい理念と体制との具現確立を目指した打球部会宣言を行った。
1944年(昭和19年)	大日本体育会の各部署理事会において,この年度の各部署事業は体育会が管理し,事業を実施しないことを決定。
1945年(昭和20年)	終戦(8月15日)。大日本体育会は各部署を解消。大日本体育会は寄附行為の改正を文部,厚生両大臣より認可され,日本体育協会(現・公益財団法人日本体育協会)として再出発した。日本ゴルフ協会は加盟団体として復帰できたが,施設(ゴルフ場)の復旧に伴わないために活動の再開が遅れた。
1946年(昭和21年)	日本ゴルフ協会規約公示(体育会会報)されJGAの体育協会復帰は公的なものになり,日本各地でゴルフ場の復旧工事が進む。
1949年(昭和24年)	日本ゴルフ協会の復活。東京・銀座の交詢社で戦後初のJGAの総会が開催される。旧打球部会役員,関東,関西両連盟の11倶楽部の代表が出席し,日本ゴルフ協会の復活を決議した。名称を日本ゴルフ連盟と改称。日本ゴルフ連盟は当分の間,旧日本ゴルフ協会規約を準用することにし,ルールは原則として米国新ルールを採用と決定,ボールは英国式の小型球の併用を認めた。
1950年(昭和25年)	日本ゴルフ連盟の名称が日本ゴルフ協会になる。
1957年(昭和32年)	JGAは理事長制を廃止して,会長制に改組。JGAが推進役となって日本プロフェッショナルゴルフ協会が誕生。
1960年(昭和35年)	JGAの女子委員会設置。
1961年(昭和36年)	オリンピック募金(来場者1人から5円)を開始。
1963年(昭和38年)	JGAハンディキャップ制の施行。オリンピック募金を来場者1人から10円とし,国際行事募金の1人5円は廃止。
1966年(昭和41年)	JGAに娯楽施設利用税対策委員会を設置。
1968年(昭和43年)	JGAの娯楽施設利用税反対実行委員会が各加盟倶楽部に陳情署名運動を依頼,政府の税制調査委員会や自治大臣に陳情。
1969年(昭和44年)	JGAは会則の一部を改定し解散,あらたに関東,関西両連盟で協会を創立した。
1970年(昭和45年)	JGAは国際交流の基金を積み立てることになり,加盟地区連盟の各倶楽部に対して昭和45年5月1日より向う1年半,来場者1人10円協力を仰いだ。
1971年(昭和46年)	JGA主催で日本女子オープン選手権を創始(TBS女子オープンを継承)。
1973年(昭和48年)	日本ゴルフ協会は,日本体育協会(現・公益財団法人日本体育協会)の加盟団体から退会。
1974年(昭和49年)	ゴルフ場固定資産税減額について自治大臣に陳情。日本ゴルフ協会は創立50周年を迎え,東京で記念行事が行われる。
1975年(昭和50年)	ヤードからメートルに, JGAは通産省からの勧告によりコースの距離表示をヤードからメートル法の採用に関し,具体的な指針を加盟各倶楽部に通達した。JGAはエチケットの精神高揚を目標に「エチケット月間」の設定を決める。
1977年(昭和52年)	JGA会長に山形章が就任,安西浩会長は名誉会長に,石井光次郎は顧問に。
1978年(昭和53年)	JGA会長に副会長の乾豊彦が就任。昭和52年11月25日から53年1月25日までの2カ月間,全国のゴルフ場,練習場などで娯楽施設利用税免除の陳情署名運動を続けてきたが,100万人を突破したため, JGA会長は当時の自治大臣を訪れ,減免除の趣旨を説明し,善処を要望。
1979年(昭和54年)	JGAミュージアム建設資金として1人10円の募金の要請を決定(昭和55年より1年間)。
1981年(昭和56年)	JGAハンディキャップ方式が全国的に実施される。ジュニア委員会設置。ジュニア選手権を創始し,ジュニアゴルフフェ어의適切な指導に踏み切る。JGAに広報委員会を設置,広報活動の活性化を図る。
1982年(昭和57年)	JGAの創立55周年を記念して創設されたゴルフミュージアムが廣野ゴルフ倶楽部に開場。
1983年(昭和58年)	細川護貞, JGA副会長に就任。

1984年(昭和59年)	第14回世界アマチュア・チーム選手権に日本チーム(阪田哲男,加藤一彦,尾家清孝,木村憲明)が初優勝(11月7日~10日,香港)。JGA60周年記念祝賀会が東京で行われ,英,米を始めアジア各国のゴルフ協会長が多数参列
1985年(昭和60年)	JGAは距離表示にメートル,ヤードの併記を各ゴルフ場に勧奨。細川護貞がJGA会長に就任し,前会長乾豊彦は名誉会長に,安西浩は顧問。1985年度のゴルフ国際会議, R&Aの委員会に委員を派遣し,一層の国際化を進める。
1986年(昭和61年)	JGAに用具審査委員会を設置,主催競技開催コースの距離表示をヤードに統一。従来のジュニア委員会を吸収したジュニア育成委員会が発足。
1987年(昭和62年)	JGAは日本体育協会(現・公益財団法人日本体育協会)に加盟復帰を申請。文部省より財団法人として認可される。寄附行為改訂により,30名の評議員会を設置。
1988年(昭和63年)	普通会員,ジュニア会員,賛助会員制度発足。
1989年(平成元年)	昭和天皇,崩御(1月7日),大喪の礼が陛下のゴルフのゆかり深い東京・新宿御苑で行われる。理事会において政策委員会及び財務委員会の設置を決定。理事会でグリーン委員会の設置を決定。
1990年(平成2年)	女子部会を設置。JGA,日本ゴルフ場事業協会,ゴルフフェ어의緑化促進協会と日本パブリックゴルフ協会の4団体は,環境・社会問題草研究に対応すべく日本ゴルフ関連団体等協議会の設置を決す。
1991年(平成3年)	文部省より主催競技の後援名義使用認可され,大臣杯,賞状の交付が行われることとなる。またスポーツ振興基金より日本アマチュア,女子アマチュア選手権に約600万の助成金を受け取ることとなった。ゴルフ関連団体協議会は日本芝草学会の協力を得て「日本芝草研究開発機構」を設立,グリーンキーパーライセンス制度を創設することとなった。
1992年(平成4年)	日本体育協会(現・公益財団法人日本体育協会)に復帰加盟(昭和13年5月31日加盟,昭和48年3月30日退会)にともない協会員制度を発足した。理事会で,(財)日本オリンピック委員会(現・公益財団法人日本オリンピック協会)(JOC)に加盟決定した。体協加盟により体協に加盟している熊本,大分,栃木,埼玉,山梨,山口の6団体が加盟承認された。
1993年(平成5年)	女子委員会・尾関久江委員長が初の女性理事に選任された。平成6年に創立70周年を行うため,準備委員会を設置。また70年史発行のため年史編集委員会を設置。(財)日本オリンピック委員会(現・公益財団法人日本オリンピック協会)(JOC)に準加盟団体として加盟承認された。
1994年(平成6年)	JGA創立70周年記念式典を帝国ホテルにて開催。
1998年(平成10年)	JGA会長に後藤田正晴,細川護貞は名誉会長にそれぞれ就任。前年,細川の会長退任後,副会長の中井文治がこの日まで会長を代行。
2001年(平成13年)	日本全国にゴルフコースは2,000を超え,英米に次ぐゴルフの盛んな国に成長した。グループがコースを造った年を日本のゴルフ元年として2001年を「ゴルフ100年」としてゴルフ関連団体と共同してさまざまな記念式典を行った。「日本のゴルフ100年」を祝う記念しセブションが10月15日,海外からの賓客を含む400余人が出席して東京のホテルで開催された。米JGA協会のフォワード氏, R&Aキャプテンのシマーズ氏らから祝辞が寄せられ「日本のゴルフ100年」を祝った。この機に日本のゴルフの発展に貢献のあった大谷光明元JGAチェアマン以下53人の先達を顕彰し,その偉業を讃えた。
2002年(平成14年)	日本のゴルフ界が待ちこがれていたゴルフ場利用税の一部改正が実現し,平成15年の4月から身体障害者,18歳未満のゴルフフェー,学校教育法(第1条)に規定する学校の先生,生徒および教育者(保健体育の实技または公認の課外活動の場合に限る),70歳以上のゴルフフェー,国民体育大会の選手に対してはゴルフ場利用税が非課税扱いとなる。同月13日に開かれた自民党税制調査会の「平成15年度税制大綱」で明らかになった。日本ゴルフ協会がゴルフ場利用税廃止運動を起こして以来,初めての朗報で,これまでに全国のゴルフフェー840万人の署名が集まった。
2003年(平成15年)	JGA会長に安西孝之が就任。
2011年(平成23年)	3月11日に東日本大震災が発生,東北・関東地方に甚大な被害をもたらした。4月4日,日本ゴルフ協会を始めとする日本ゴルフ関連20団体は,日本ゴルフ界合同震災復興支援チャリティプログラムに取り組みことを発表。「震災復興支援グリーン・ティー・チャリティー~日本のゴルフが,日本のチカラに~」のスローガンの下,募金箱の設置やチャリティーグッズの販売などの支援活動に取り組んだ。日本ゴルフ協会では,主催競技に「震災復興支援グリーン・ティー・チャリティー」を冠し,競技会場での募金活動を行ったほか,主催オープンゴルフ選手権の賞金5%を獲得賞金選手から赤十字社へ寄付を行った。また,各ゴルフ場においても募金の支援活動に取り組み,被災地の1日も早い復興のための活動に日本ゴルフ界が一致団結して取り組んだ。
2012年(平成24年)	日本ゴルフ協会は,新しい公益法人制度(公益法人関連三法)の施行に伴い,3月21日に移行認定を受け,4月1日に公益財団法人移行手続きを行い,公益財団法人として新たなスタートを切った。当協会常務理事で国際委員長(当時)を務める川田太三が,2013年度ジョー・タイ賞を受賞することがUSGAから発表された。同賞は,ボランティアでゴルフ競技に多大な貢献を果たした個人に贈られるもの。川田氏の30年にもわたるゴルフ競技の国際親善大使としての貢献とUSGA主催のナショナル選手権への貢献に対して受賞が決定したもので,初の米国人以外の受賞者となった。なお,表彰式は2013年2月2日のUSGA年次総会で挙行された。
2013年(平成25年)	東京,マドリド,イスタンブールの3都市が候補に残っていた2020年オリンピックの開催都市が,ブエノスアイレスで行われた国際オリンピック委員会総会で東京に決定した。東京でのオリンピック開催は,1964年以来2度目。なお,2020年オリンピックのゴルフ競技は,埼玉県の大宮CCが舞台となる。

世界アマチュア ゴルフチーム選手権に向けて

堀田男子ナショナル強化部会長／阪本女子ナショナル強化部会長インタビュー

52年ぶりの自国開催を控える世界アマチュアゴルフチーム選手権。日本チームは男子が1984年にチーム優勝、女子も2004年大会に4位入賞を果たしている。日本チーム男女初の东道優勝に向けて、日本チームを率いる堀田勝市男子ナショナル強化部会長と阪本知子女子ナショナル強化部会長が、世界アマに向けての思いを語る。



堀田勝市氏(左)
阪本知子氏(右)

代表選考はアマチュア選手権終了後の日本アマチュアゴルフランキングが基本に

—世界アマチュアゴルフチーム選手権まで残りわずかになりました。男女ナショナルチーム強化部会長のお2人に詳細をお聞きしたいのですが、日本代表選手はどのようにして決まるのでしょうか？

堀田 日本アマチュアゴルフ選手権終了時のJGAアマチュアランキングを基準に選考します。

阪本 同様に日本女子アマチュアゴルフ選手権終了時で決めます。

堀田 もちろんチーム戦ということを考慮するので、ランキングの上位3人が必ず代表になるということでもありません。

—なるほど。いずれにしてもナショナルアマチュアという最も実力が問われる試合の結果を待って、ということですね。

阪本 そうです。

—基準となる日本アマチュアゴルフランキングが選考に当たって大きな要素となるようですが、この制度の導入はどのような効果を生み出していますか。

堀田 ポイント対象となる競技がはっきりしているので、どの競技に出場すればポイントがつくのが選手にはっきり分かるようになり、それを計算することができますと言う点が大きいですね。チームに入れるかどうかギリギリのライン上にいると、ナショナルチームに入りたい選手はそれを意識することになる。

阪本 女子でもそうですね。ランキングは実力を正確に反映していると私は感じています。

堀田 ゴルフの実力だけで選考していいのだろうか等という意見もないわけではないのですが、ランキングが確立したことで選手たちが切磋琢磨するようになりました。

阪本 そうですね。

堀田 これまでは、日本アマ優勝者と日本オープンのローアマチュア、それに春、夏の高校選手権の優勝者の一体誰が一番強いのかははっきりしていなかったですから。

阪本 女子の場合は、ナショナルチームのメンバーに対するリスペクトがしっかりあるので、力のある選手ははっきり目標にしていますね。

世界との差は、 フィジカルとチーム戦への意識

—日本チームは過去に男子が1度優勝しており、女子も入賞を経験しています。けれども、残念ながらここ何回かは苦戦を強いられています。その原因は何でしょうか？

阪本 (女子が)2004年のプエルトリコ大会で4位になった時は、里深(真弓)キャプテンの下、私もコーチで参加しました。1位スウェーデン、2位アメリカ、3位カナダに続く4位だったのですが、正直、上位3チームとは大きな差のある4位だったんです。その時に里深さんと話したのが、世界アマは練習ラウンドを含めると一週間の長丁場でもあり、やはり世界とはフィジカルの差が大きいということでした。だからアスリートをしっかり育てたいと考え、その部分を強化してきました。まだ十分とは言えませんが、ずいぶんよくなりました。ショットの精度、メンタルも含めての経験値



が低いのかと思い、海外派遣も積極的に行ってきました。ただ、他国の伸びについていけないと言うのも正直なところ。卓球では各年代ごとにチームを編成し、若年層も積極的に強化しています。その結果が、世界大会での好成績につながっているのを見ると、ゴルフ競技も若年層への強化を充実させなければならないと思います。現在、JGAと各地区ゴルフ連盟と協力して一貫育成システムを稼働していますが、まだ卓球のように洗練されてはいません。少しでも早く、卓球のような強化策に取り組みたいのですが、一朝一夕に完璧なものにはならないでしょう。ただ、今年も自国開催でもあり、地の利を活かしてやっていくしかないと思っています。

堀田 フィジカルに関しては、男子は女子より強化開始が遅れています。現状としてプロを目指す選手が多く、ゴルフは個人競技という感覚が強い中、いかにチーム戦へのモチベーションを高めるか。チーム戦に向けてしっかり選手を選考し、協会として強化して臨みたいですね。

—合宿の内容は？

阪本 主にフィジカルです。シーズン後半になってもバテないようなトレーニングプログラムを提供し、月1回ペースで選手を集めることを考えています。その間はそれぞれが自分でこなすことです。



**代表選手は
日の丸を背負うプライドと責任、
義務を感じてほしい**

—日本代表チームを率いて大会に臨むお気持ちは？

堀田 責任重大ですが、主役は選手です。ただ団体戦をしっかり意識してプレーする選手しか選ばないと部分にはふれずにいきたいですね。日の丸を背負っていることをしっかり意識してモチベーションを上げさせたいです。

阪本 こちらも責任重大ですねえ（苦笑）。ただ、選手にはナショナルチームの上位3名として世界アマで戦う以上、日の丸をつけることへのプライドはもちろんですが、義務と責任をしっかり感じて欲しい。ナショナルチーム7人の中の3人ではなく、日本のアマチュアゴルファー全員の代表なので。そのためには、準備段階でこちらが提供するさまざまなプログラムをきちんとこなすということが、選考の条件でもあります。やはり閉会式で表彰台に上がる感激は経験しないと分からないこと。2002年の釜山のアジア大会でセンターポールに日の丸が揚がった時は、本当に感激しましたから、ぜひ、みんなに経験して欲しい。それが東京五輪につながる基礎になればいい。



—第1ラウンドスタート前には、選手たちにどんな言葉をかけますか？

阪本 出来るだけの準備はしたのだから自信を持ってやろう！と言えるといいな、ということですね。それと日の丸を揚げよう、ということでしょうか。

堀田 金メダルを取ろう！と話しているので、そのことですね。

—期待しています。

—海外派遣も数多く実施されています。その際に特に気をつけていることは？

阪本 まず食事です。女子は特に年齢が低いこともあって海外での料理が口に合わない選手が多いんです。特に香辛料が強い料理が主流のアジア地域では食事でも苦勞することが多いので、そういう時の対応策として、ふりかけやマヨネーズ、ドレッシング、ポン酢などを持って行くようにしています。きちんと食べないとバテバテになってしまいます。中国や韓国の選手は、何でもよく食べますよ。（笑）

堀田 男子もそういう部分はありますね。食は明日のためですから。

—その点では、自国開催の世界アマは食べなれた食事が用意されるので、問題なさそうですね。

**上位入賞にはアイアンの正確性と
パッティングが鍵を握る**

—世界アマの舞台(軽井沢72ゴルフ 東/入山・押立コース)は、昨年ネイバーストロフィーチーム選手権が開催されました。

堀田 ネイバーストロフィーでは実力が出し切れず、韓国に大差で敗れてしまいました。上位はアイアンショットの精度のいい選手が乗り込んでくるので、パーディ合戦になるでしょう。そこで大事なものはパッティングとメンタル。チーム戦の戦い方をしっかり意識して欲しい。

阪本 やはりネイバースの事を考えると、どれだけスコアを伸ばせるかの戦いになると思います。そうするとパッティングがうまくないと話にならない。だから、地の利を活かしてどれだけ練習ラウンドができるかですね。

—コースの攻略ポイントは？

堀田 アイアンショットの精度とパッティングにつきます。

阪本 そう、正確性ですね。



世界アマチュアゴルフチーム選手権 大会概要

大会名
Espirito Santo Trophy
Women's World Amateur Team Championship
エスピリトサント・トロフィー
世界女子アマチュアゴルフチーム選手権
Eisenhower Trophy
World Amateur Team Championship
アイゼンハワー・トロフィー
世界アマチュアゴルフチーム選手権

主催
International Golf Federation (IGF)
国際ゴルフ連盟

主管
公益財団法人 日本ゴルフ協会 (JGA)

後援
文部科学省、外務省、観光庁、長野県、軽井沢町、関東ゴルフ連盟、長野県ゴルフ協会、信濃毎日新聞社、朝日新聞社、産経新聞社、日本経済新聞社、毎日新聞社、読売新聞社、サンケイスポーツ、スポーツニッポン、デイリースポーツ、日刊スポーツ、報知新聞

開催期間
女子 指定練習日 2014年 9月 1日～ 9月 2日
選手権 2014年 9月 3日～ 9月 6日
男子 指定練習日 2014年 9月 8日～ 9月 9日
選手権 2014年 9月10日～ 9月13日

開催場所
軽井沢72ゴルフ 東(入山・押立コース)

過去の成績一覧

	開催地	男子優勝チーム	女子優勝チーム
1958	スコットランド	オーストラリア	
1960	アメリカ	アメリカ	
1962	日本	アメリカ	
1964	男子:イタリア/女子:フランス	イギリス/アイルランド	フランス
1966	メキシコ	オーストラリア	アメリカ
1968	オーストラリア	アメリカ	アメリカ
1970	スペイン	アメリカ	アメリカ
1972	アルゼンチン	アメリカ	アメリカ
1974	ドミニカ	アメリカ	アメリカ
1976	ポルトガル	イギリス/アイルランド	アメリカ
1978	フィジー	アメリカ	オーストラリア
1980	アメリカ	アメリカ	アメリカ
1982	スイス	アメリカ	アメリカ
1984	香港	日本	アメリカ
1986	ベネズエラ	カナダ	スペイン
1988	スウェーデン	イギリス/アイルランド	アメリカ
1990	ニュージーランド	スウェーデン	アメリカ
1992	カナダ	ニュージーランド	スペイン
1994	フランス	アメリカ	アメリカ
1996	フィリピン	オーストラリア	韓国
1998	チリ	イギリス/アイルランド	アメリカ
2000	ドイツ	アメリカ	フランス
2002	マレーシア	アメリカ	オーストラリア
2004	プエルトリコ	アメリカ	スウェーデン
2006	南アフリカ	オランダ	南アフリカ
2008	オーストラリア	スコットランド	スウェーデン
2010	アルゼンチン	フランス	韓国
2012	トルコ	アメリカ	韓国

世界アマメンバーに選ばれたという 気持ちが僕の競技人生を長くしてくれた

1984年香港大会優勝 日本代表メンバー 阪田哲男氏インタビュー

9月に迫ったアマチュアゴルフの祭典、世界アマ。男子は73、女子は50の国と地域から選手たちが集まって戦う様は壮観だが、11回もその舞台に立った男がいる。阪田哲男。日本が優勝した1984年香港大会のメンバーでもあり、長い間日本のアマチュアゴルフ界を引っ張ってきた阪田が、大会の素晴らしさについてじっくりと語った。



阪田 哲男 Tetsuo Sakata

1949年8月17日生まれ
14歳のときゴルフを始め、数々のアマチュアタイトルを獲得している。1984年に香港で開催されたアイゼンハワートロフィー世界アマチュアゴルフチーム選手権で個人、団体共に優勝。長年、日本のアマチュアゴルフ界を牽引してきた。

聞き手・構成：JGA オフィシャルライター 三田村昌鳳

中部銀次郎が初めて世界アマに参加したのが、1960年。米国メリオンだった。アメリカチームには、アマ時代のジャック・ニクラスがいた。圧倒的な強さを目の当たりに見て、18歳の中部は驚愕した。世界と日本の彼我の差を痛感したという。

その2年後の大会が、日本の川奈で開かれた。地元開催だったがやはりアメリカチームが優勝し、日本は9位だった。

阪田哲男が世界アマに初出場したのは、1970年のスペイン大会だった。当時、学生ゴルフ界で圧倒的な強さを見せた日大の山田健一、高橋信雄。関西の入江勉と阪田の、いわば最強メンバーだった。それでもアメリカには勝てずに9位に終わった。

「僕が参加させて貰ってからですよ。なんとか日の丸を掲揚したいという意識が芽生えて来たんです。それは簡単には行かないんですけどね。そういう目標をしっかりと設定して、世界アマで戦うというチーム作りをして行ったんだと思います」

その4年後のドミニカ共和国の大会で日本は、初めて2位となった。

阪田哲男は、以来11回も世界アマの日本チームの一員として出場している。

「世界アマという大会は、日本ではほとんどマスコミに報道されていないんですけど、それはそれは凄い大会なんですよ。僕も、初出場して、はじめて実感したんですけどね」

阪田は、振り返る。

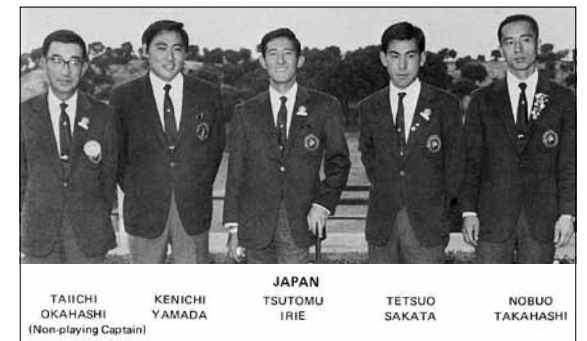
「背筋がピンと伸びるというか、開会式が始まったときは、凄いとこに参加してしまったなと思いましたよ。オリンピックの開会式ではないですけど、日の丸を背負う。日本代表で戦うという緊張感と凛とした気持ちは、いまでも忘れません」

世界アマでは、当時から参加国の各国が次々に行進。世界からの参加国の国旗が掲揚される。国歌が流れる。代表選手としてのプライドが心から湧き上がる。

「アメリカは、当時、学生アマが2人、社会人アマが2人という布陣。僕が参加していたころは、ラニー・ワドキンス、ベン・クレンショー。あるいはジェリー・ペイト…みんなその後世界のメジャーに勝っている選手ばかり」

確かにアメリカは、ジャック・ニクラスからタイガー・ウッズまで、その時代の最強アマチュアを配し、その後プロ転向した選手は、世界で大活躍している名手たちばかりだった。

「日の丸を挙げたいということが、徐々に浸透してきた背景には、当時の世界アマ監督だった鍋島直要さんの熱意も大きかったんです。常日頃から、研鑽していく姿勢を教わりましたからね」



阪田が初出場した1970年大会の日本チーム。



1972年大会のアメリカチーム。



1994大会で優勝したアメリカチーム。トロフィーを持つタイガー・ウッズ(写真左)

1976年ポルトガル大会。

「日本チームは、僕のほかに中部銀次郎、倉本昌弘、森道広。これも2位となった大会です。優勝したアイルランドのチームと2打差だったんですよ。団体戦でね。これも思い出深い大会でした」

でも…と阪田は、言った。

「自分自身の中では、パインハーストで開催した1980年大会ですね。実は、自分はこれを最後に世界アマはもう卒業しようと思っていたんですよ。ハル・サットン率いるアメリカチームは、ほんとに強豪。コースも今年の全米オープンコース。凄く難しいコースですよ。当時は、まだパーシモン時代。ある種の限界というか、むしろ後進に道を譲ろうかな、という弱音もでていたんですね。ティーショットでは、世界と伍しているんですけど、地面(フェアウェイ、ラフ)からのショットで大きく負けるわけです。番手も違うし、圧倒的な飛距離の違いが出てしまう。ところが、あの難しいパインハーストの1番ホールで、僕は4日間でバーディを3回獲れた。しかもロングアイアンで攻めてです。団体で4位。個人でも6位に入って、まだやれるという自信が湧いた大会だったんですよ」

さらにその2年後の1982年スイス大会。この年は、アメリカと激しい優勝争いを展開した。例えば、1974年大会の2位から始まって、2位、9位、4位と日本のアマチュアゴルフが世界のトップに向かって邁進して行った時代だった。それでも世界の壁は厚く、アメリカが立ちはだかる。その中で、アメリカに次ぐ2位を経験する。

「世界アマという大会は、確かに技量の面でも高いレベルを要求されますが、開会式、そしてパーティーでも交流が必要で、そういう国際人のアマチュア代表という立ち居振る舞いができないといけないわけです。そういうすべてのイベントを通して世界アマの各国代表選手なわけですからね。もちろん、ゴルフ後進国から参加する選手の中には、大叩きする選手もいました。でも、その優勝国から最下位までが世界アマなんですよ」

世界アマは、アイゼンハワー・トロフィーと呼ばれる。当時の米大統領の名前を冠したのが嚆矢(こうし)である。



1984年香港大会。そのときは、中部銀次郎が、ノンプレイング・キャプテンとして派遣された。チームは、阪田哲男のほかに、加藤一彦、尾家清孝、木村憲明である。個性豊かな選手がチームメンバーとなった。

「確か2日目にアメリカが苦戦して、日本チームが首位になったんです。結果は、そのまま最終日まで首位を守って初優勝したわけですけど、すべてが咬み合っていた試合でした。キャプテンの中部さんの適切なアドバイス。それは、みんな真摯に受け止めて。選手心理をしっかりと掴んでのアドバイスでしたからね。それに地の利も良かったんですよ。香港ですからアジアの空気。食事にも苦労しないです」



1984年香港大会で個人優勝の成績を納め、団体優勝での立役者となった阪田。



記念すべき JGA60 周年記念祝賀会でアイゼンハワートロフィーを披露した日本チーム。

しね。世界アマは世界各地での開催ですから、その開催国の環境、空気、習慣、食事。コースでも芝種の違いなど、それはいろいろ対応するのに苦労するわけです。ですから香港は、日本勢には有利だったということも幸運でした。あとで、尾家に聞いた話ですが、毎晩選手たちでミーティングをやったわけですが、阪田さん、とても怖かったですよ(笑)って言われたんです。自分では、そんな気持ちはなかったけど、勝ちたい。チームをうまくまとめて、とにかくベストを出して勝ちたいという気持ちが強かったんですよね」

日本チームの初優勝だった。

第1回の1958年英国大会から日本チームが参加して、ちょうど14回目。28年の歳月を経ての初優勝だった。

「そのときの写真って、ほとんどないんですよ。日本のゴルフ界にとっては歴史的な瞬間だったし、歴史に残る大会なのに…もっとマスコミの人たちが注目して欲しいと思いますね」

キャプテン中部銀次郎が、英語で優勝スピーチをした。もちろん急遽のことでたいそう慌てたという。しかし阪田は「いやー、素晴らしいスピーチでしたよ」と、いまでも胸に秘めている。

「1962年以来、52年ぶりの日本開催ですから、日本チームはもちろんのこと、日本のゴルフファンの人たちが、大いなる声援と、世界アマという素晴らしい大会、その意義を是非知ってほしいと思います」

阪田哲男は、最初は日本アマ参加、そして優勝が目標でスタートしたアマ競技人生。それが世界アマを体験して、世界アマメンバーに選ばれたいという目標に変わったという。

「それが僕の競技人生を長くしてくれたのだと思います」としみじみと語った。



香港大会で優勝を果たした日本チーム。アイゼンハワートロフィーを前に撮影した貴重な1枚。